

「総合的な学習」を「ごまかし勉強」抑止の切り札に

跡見学園女子大学教授
藤澤 伸介

総合的な学習の時間のねらい

学習指導要領総則によれば、総合的な学習の時間のねらいは次のとおりだ。

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

「指示待ち族」なる言葉が使われるようになって久しい。社会人になっても自分の頭で自分の仕事を考えるのが苦手だという人が、多いということだ。まさに(1)の力が欠けているのであろう。(2)の「学び方」については、教育課程審議会答申(平成10年7月29日)によると、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方等を指していることがわかるが、小中高の期間を通じてこれらの力が付かないままに、大学生になっているという指摘が、あちこちでなされている。もしそうであるとするなら、これらの力は、現代の子供たちに最も育成すべき点なので、総合的な学習の時間が新しい教育課程の柱になっているのは、まさに時宜を得たことといえる。

表面的には、子供たちは豊富な教材に囲まれているし、教師や親は以前にも増して教育に注意を払っているように見える。学習塾や宅配教材も利用者が多いのに、(1)や(2)の力がついていないのは一体なぜなのだろうか。これに関する筆者の調査結果を報告するところから、この論を始めたい。

学習の質的低下の実態

学校は、人が社会生活をしていく上で必要なことを、集中的・系統的に習得する場である。だから、各教科の学習内容が学習者の知的体系の中しっかりと定着し、必要に応じて活用できるようにすることが重要である。それと同時に、新しいことを自分で調べて身に付けたり、問題に直面した時に自分の頭で考えて解決できる力をつけることも必要だ。しかし「試験に出ること以外は勉強しない」という、手抜き態度で学習に臨む子供たちが、成績にかかわらず最近は特に目立つようになった。いわば定期試験用の「ごまかし勉強」だ。

かつて、70年代までの中学生は自分で参考書を選び、詳しい解説で内容を理解し、試験前は自分で暗記項目を抜き出して覚えるという主体的な学習をしていた。ところが、80年代になると教科書準拠の宅配教材が普及し、学習方針を自分で考えなくても済むようにな

ってくる。参考書も出題箇所を教えたり暗記材料を提供するような即効薬タイプが中心になり、手抜きが進行する。

そして90年代以降になると「学校の授業での動機づけに基づき、学習内容を家庭で発展、深化させ、さらに記憶に定着させる」という「正統派の学習」は少数派になってしまった。試験が終われば何も残らない「ごまかし勉強」が、今は主流なのである。これは高校生も同じことだ。筆者の調査によれば、1979年度生まれの人たちから、ごまかし勉強をする割合が、正統派の学習をする割合を上回るようになってしまった。

この原因については、受験競争のためにそうなったと考える向きが多いが、それは誤りである。過去に受験競争が最も激しかったのは、団塊の世代が受験生であった1960年代であるが、ごまかし勉強は今ほど多くなかった。入学試験の出題範囲がかなり広いので、意味・関連を理解しない丸暗記では、たくさんの知識を詰め込むことができないためである。しかし、学齢人口の減少によって受験競争が緩和されたり、ゆとりのために学習項目が徐々に減らされるにつれて、少ない範囲を機械的に丸暗記して、定期試験さえ乗り切っただけで済むようになり、ごまかし勉強が蔓延した。これが、今の子供たちの姿である。

このごまかし勉強蔓延の背景には、教育産業の発展や、情報技術の革新があることも見落とせない。例えば、周知のように定期試験問題作成用のコンピュータ・ソフトが、手間を省きたい教師に利用されている。一方で、そのソフトの問題は、塾教材や宅配教材として直接生徒の手にも渡る。これで生徒は、最低限の勉強だけで楽に定期試験で良い点が取れ、テスト問題を作る教材会社は儲かるのだ。親も教師も、結果としての成績さえよければ、教育の成果があったものとみなして、特に問

題はないと考え、学力の内実は問わないことが多い。中には、出題箇所のみを丸暗記で乗り切る「ごまかし勉強」を奨励する教師までいる。このような誰にも不都合のない「ごまかし勉強生成システム」が、今や社会に根づいてしまっているのである。

確かに、試験に出るところだけを機械的に丸暗記すれば、簡単に上位の成績が取れるかもしれないが、意味がわかっていなければすぐに忘れてしまい、身に付かないので、ごまかし勉強をした生徒は、実は学ぶ喜びを味わうことができない。しかも、習得の手順を考えたり段取りを付けたりしていないし、自分で要点を見つけ出す努力や、学習材料の作成をしていないので、誰かに頼って指示してもらえない限りは、新しいことが習得できるようにならないのである。かくして学力が低下するのだ。しかし、世間の関心は、もっぱらテストの得点や学習時間といった学習の量的側面に向けられていて、このような学習の質的低下現象は、残念ながら、あまり気づかれていない。

さらに困ったことには、完備された宅配教材や定期試験予想問題のせいで、学校の授業の価値がどんどん低下している。つまり、宅配教材を作業としてこなし、定期試験予想問題の解答を暗記しておきさえすれば、きちんと学校の授業に参加しなくても、良い成績が簡単に取れてしまうのだ。

最近では、このことが原因で学業に嫌気がさす子供たちが、着実に増加している。「暗記してはテストして忘れ、暗記してはテストして忘れ…」という繰り返しが無意味だ」というわけだ。ある意味で、健全な感覚ではある。

社会に「ごまかし勉強生成システム」が強固に巣喰っている以上、放置しても自然回復するとは思えないので、やはり「学び方」が修得できるような工夫を、各教科で積極的に

すると同時に、それを総括するような教育活動が工夫されるべきであろう。それには、この総合的な学習の時間が最も適切である。

学習の動機

頑張って学習をしようという動機には、どんなものがあるだろうか。学習動機の2要因モデル（市川、1998）によれば、必ずしも人は単独の動機で学習するわけではないが、充実志向－訓練志向－実用志向の三つは相互に比較的相関が高く（内容関与的動機）、関係志向－自尊志向－報酬志向（内容分離的動機）の三つもたがいに相関が高いという。そして、内容関与的動機で学習する人は、適切な学習方略を活用しやすく、学業成績も比較的良い傾向があるとのことだ。従って、「他者につられて」「競争心から」「御褒美目当てで」といった内容分離的動機を強調するのではなく、充実志向、訓練志向、実用志向で子供たちを学習に方向づけることが、より効果的であると考えられる。

充実志向の動機を高めるためには、学ぶことの楽しさが味わえるような授業作りが必要である。楽しいといっても、それは授業中にゲームをしたりすることではない。学ぶ喜びが味わえるためには、体験を通して概念化が促進されたり、新しい概念が形成されて認識の変化を体験したりすることが求められる。つまり「なるほど、そうだったのか」という体験をさせるのである。

訓練志向の動機を高めるには、学習によって自分を成長させたいという気持ちを満足させるような授業作りが必要である。最近では、個人内評価やポートフォリオ評価が工夫されるようになり、学習者が自己の成長を認識できるようになってきた。これは歓迎すべき傾向である。

実用志向の動機を高めるためには、各教科

が実際に役立つ状況を教育場面で作ったり、応用分野の情報を積極的に伝えていく必要がある。各単元の知識や技能が各分野でどのように活かされているのかについて、生徒が自分から情報を得るには支援が必要なので、教師の役割は大きいと考えられる。

工業高校での動機づけ

筆者のこれまでの調査では、文科系に進む学習者は、面白いと思えばどの教科もきちんとやるが、面白くないとどれもやらない傾向があって、比較的充実志向で学習に取り組む可能性が高い。これに対し、理科系に進む学習者は、必要性がわかる教科はきちんとやるが、無駄だと思う教科はやらない傾向があって、どちらかといえば実用志向が強いように見える。もしそういうことが言えるのであれば、工業高校の教育では、理科以外の教科も、どのように役立つかがわかる授業に組み立てていく必要があるだろう。

ここに、総合的な学習の時間を効果的に機能させる鍵が、あるように思われる。何か大きなプロジェクトを立ち上げ、その問題解決をするために、結局すべての科目の学習が必要になってくる、という設定をすれば良いのである。そうすれば「何のためにこんなことをやらされているんだ」という感覚が学習者から消え、各教科の価値が認識されるに違いない。元来、工業高校は、体験的に学習を進めていくことを標榜している教育機関であるから、総合的な学習の時間を、充実志向や実用志向の動機づけを推進する中心的教科として配置するのには、非常に向いているといえるであろう。従来教科もこれに連動させて学習順序を工夫すると、意欲を引き出すのに成功するのではないだろうか。

話をわかりやすくするために、例として

「輸入住宅建設プロジェクト」で、各教科の関連づけを考えてみたい。まず、地域の希望者を募集し、生徒が家を設計して、部材を輸入し、現地で組み立てて完成させる。経費は施主に出してもらうので構わない。一級建築士事務所に指導してもらうのも、良いであろう。アメリカの高校でこれを実施しているところがあるようだが、工務店に依頼するのに比べ、生徒の件数費分が節約できるし、手抜き工事がないので、申し込む施主が多いそうだ。このような設定であれば、すべての教科の知識を総動員する必要が出てくるので、各教科の実用性を認識せざるを得なくなる。

制作にあたって考慮すべきことをすべて列挙することはできないが、少し考えただけでも、いかに多くの教科内容が関わるかが、容易に想像できる。

【社会科】

〔地歴〕各地の気候と住居の特徴、建設部材の産地、各地の生活様式と家具、建築デザインの変遷と時代背景

〔公民〕不動産に関する法律（民法、宅地建物取引業法、不動産登記法、土地基本法、農地法、都市計画法、建築基準法、地価公示法…）、用途地域と区域、価格のしくみ、税法、官公署の役割分担、個人輸入、為替の変動

【理科】

〔物理〕断熱構造、構造計算、電気の配線、電磁波、エアコン

〔化学〕化学物質（ホルムアルデヒド、揮発性有機化合物、ダイオキシン、殺虫剤…）

〔生物〕家の中のカビやダニ、人間のアレルギー、照明と視力、病気と人体、動植物

〔地学〕季節による太陽高度と日照、地盤、地震、気象変化

【数学】

三角測量と面積、太陽高度計算、融資計算

比較、関数分析によるメンテナンスの必要予測

【英語】

部材の輸入にあたっての取引の英文、各種カタログの読み取り、業者との交渉の会話

ここでは、英語を活かせるように輸入住宅にしたが、日本の歴史的建造物の復元プロジェクトにすると、古文の読解を入れたりすることもできる。施主とのコミュニケーションは、当然、国語の力が関係してくる。

ここまで読んで、指導要領との関連で可能性を疑問に思われるかもしれないが、行政施策には幅があり大抵のことは可能だ。だから、批判を恐れずに、自由な発想でカリキュラムを試行錯誤すると良いのではないだろうか。筆者が述べた例は、それぞれの学校にある固有の事情を踏まえずに考えているので、ある意味では、どの学校にも不向きな教育課程かもしれない。しかし、批判材料として利用していただくと、それが刺激になってその学校独自の新しいカリキュラムを組み立てるきっかけになるのではと考え、あえて書いた次第である。

このように、総合的な学習の時間で具体的なプロジェクトを実施し、従来教科の内容をそれに連動させるようにすれば、学習内容の意味に関心が向き、習得意欲が増して、自然に学習のスキルも高まることと考えられる。ごまかし勉強による意欲の低下が、少しは阻止できるであろう。

独自の教育課程立案の効用

筆者は、インターンシップ・プログラムに参加して、カナダの小学校で3か月間授業をしたことがある。その学校では、どの先生たちも生き生きとした表情で子供たちに接していたのが、非常に印象的であった。

就任前、年間カリキュラムの中のどこかの部分を引き受けるのが役目だと予想していたのだが、校長から「あなたが教育的だと考えるなら、何をどう教えようと構わない」と言われ、とても驚いた。カナダには国家的な統一教育課程が存在せず、地区の教育委員会が大枠を決め、具体的な教育内容や方法は担当教員の裁量に任されているようだ。ちょっとしたカルチャーショックだった。筆者の場合、予告されていた「日本文化の紹介」というテーマにあわせた資料を、日本からたくさん持ちこんでいたので、早速授業計画作成に入った。3か月分の指導要領作成は、実に楽しいものであった。先生たちの生き生きとした表情の秘密は、ここにあるのだろうと感じた。初め筆者が受け持ったのは6年生と7年生の数コマであったが、生徒たちはとても喜んでくれて、評判を聞きつけた他の学年からも授業の希望が殺到し、最後の頃はこなすのが大変だった。これも、やりたいようにやらせてもらえたためだと思っている。

それにしても、何という信頼感であろう。

教えたいことを構造化し、興味を引くように演出を考え、教材を準備する力がなければ、到底勤まらない仕事のはずである。でも、そこまで任せられてしまうと、俄然、どの教師も張り切ってしまうに違いない。日本の教師は、そこまでの力は期待されてこなかったから、教育の質を確保するために、学習内容、学習時期、学習方法、学習教材などをすべて政府が決めてしまい、あとは、それを教師に強制する形になってきた。

しかし、型にはめて統制すると、人間は独創性を発揮することができない。統制し過ぎて教師からエネルギーを奪っているというのが、これまでの日本の教育行政に対する批判の一つであった。そういう意味で今回の指導要領は、必要最低限の教育内容のみ拘束し、後は学校裁量部分を多くしたので、格段の進歩と考えられるだろう。特に総合的な学習の時間に関しては、それぞれの学校が学習指導要領を作成できるわけで、これで、やっと日本の教師にも独創性を発揮する機会が訪れたと考えることができる。大いに期待したい。

資格取得にチャレンジ!

チャレンジライセンス危険物取扱者テキストシリーズ

丙種危険物取扱者テキスト B5判128p. 定価800円

乙種4類危険物取扱者テキスト B5判152p. 定価800円

乙種1・2・3・5・6類危険物取扱者テキスト B5判136p. 定価950円

定価はすべて5%税込価格です

イラストを満載した解説でわかりやすく展開!

計算問題には「例題」を設け、解法を解説!

同一の問題を3回チェックできる解答欄!

ご採用校には問題自動作成CD-ROMのサービスもあります(丙種/乙4のみ)

消防法改正、危険物の規制に関する政令の改正、
危険物の規制に関する規則の改正に対応しました。